指導概要

講師氏名：　齋藤収一

担当科目：　英語

指導曜日：　国立校　：月・木・金　13:00～21:00
吉祥寺校：火・土　13:00～21:00
公休日　：水・日・祝

17時コマは校舎近隣の学校に通う生徒が下校時に直接茗渓に寄(よ)るため同時受講者数が最多となり、19時コマ（最終）では校舎近隣の自宅から来る生徒が中心となり同時受講者数が比較的少なくなります（13時～16時の早いコマや19時コマでは１対１指導になることもあります）。

メールやSlack、FAX、電話などで事前にご連絡いただければ、欠席した指導を振替実施いたします。13:00から16:00の間の時間帯であれば指導当日に時間変更することも可能です（例えば学校が午前授業の日に指導開始時間を14時からに早めるなど）。

講師経歴：　ウィスコンシン大学マディソン校卒（学士、政治学）、サウスフロリダ大学大学院卒（修士、社会政治思想）、バージニア大学シャーロッツビル校大学院中退（博士、政治学）。市進学院→茗渓予備校。国立校校舎長。茗渓予備校ウェブサイト作成・管理。

指導理念：　英語は①日本の中学・高校で生徒たちが学ぶ**主要科目**の一つであり、文法規則や長文読解においては**学問**的な側面も確かにありますが、元来英語は②**コミュニケーションのための道具**であるところの**言語**であり、会話（英会話）や文章作成（自由英作文）などにおいては音楽や体育に近い**実技科目**的側面があります。また、英語に限らず言語は一般に③根源(こんげん)的な**思考のための道具**でもあります（言語を介(かい)さずして人は複雑な思考は不可能です）。真の意味での英語コミュニケーション実践のためには、頭の中の段階から日本語を介さず直接**英語で考え**、それを**英語で表せる**ようになることが肝要となります。

そこで私は、アメリカの大学・大学院で長らく学んだ経験を生かして、生徒にⒶしっかりと**英文法**をマスタァさせ学術書レベルまで読み込める**読解力**を育(はぐく)ませる一方で、生徒にⒷ物事を分析的（analytically）に考える**思考力**を身につけさせ、その上で自由英作文指導を通してⒸそれを英語で統合的（synthetically）に**書き表わせる**ようにすることを目標に日々指導を行っています。

目 次

1 日毎の指導計画
2 長期の指導計画
3 家庭学習の指導（宿題）
4 指導の役目
5 文法先行学習
6 文法演習
7 長文読解演習
8 語彙学習
9 語法対策
10 英文解釈
11 自由英作文
12 リスニング
13 スピーキング
14 英検･TOEIC
15 定期試験対策
16 タブレット・パソコン

1 日毎の指導計画

指導は1科目１２０分1コマで、以下のような基本構成で行なっています：

(1) **語彙小テスト（＋文法語法小演習）**
(2) **Ⓐ長文読解演習またはⒷ文法導入・演習**

ウォーミングアップの語彙小テスト（≒英単語小テスト）はできる限り毎回指導冒頭で実施するようにしています。文法語法小演習（後述）は高1頃より開始します。

指導の**メイン**はⒶ長文読解演習またはⒷ英文法の導入解説・演習実施になります。学習進度、時期、あるいは生徒の要望により、いずれかを中心に実施します。（それぞれ1時間ずつ半々で実施することも可能です。）

必要に応じて英検一次試験対策のリスニング演習や自由英作文演習、英検二次試験対策のスピーキング演習（模擬面談）、英文解釈演習なども指導内に組み込んで実施します。

2 長期の指導計画

英語学習の指導は生徒やご家庭の要望に合わせて行なっていきます。**中学生**の場合：

(1) **先行学習型（基本）**：Z会出版『**New Treasure**』などの検定外教科書を使用している授業進度の速い中高一貫校に通う生徒の場合、①学期中は**学校授業と並走**する形で英文法学習を進めていき、②学校が春夏秋の長期休暇に入ると、季節講習において次学期に習う英文法の**先行学習**を進めていきます。茗渓予備校に通う生徒の多くは上位中高一貫校生であるため、**これが基本的な学習形態**になります。

厳しい中学受験を勝ち抜いて入学した、質の高い授業を提供している中高一貫校にせっかく通っているのであれば、それを活かさない手はありません。しかし、検定外教科書使用校の英語授業は学習順が**変則的**で進度も**速い**ため、時に自学自習のみではついていくのが困難になることがあります。茗渓予備校では中高一貫教育のポテンシャルを120%引き出してその恩恵を十分に享受できるように、生徒の学習をしっかりとサポートしていきます。

(2) **独立カリキュラム型**：①三省堂『**New Crown**』などの文科省検定教科書を使用している一般的な公立校、②学習指導要領通りに授業を進める中高一貫校、③検定外教科書を採用していても進度が遅く、例えば『**New Treasure**』であればStage 3を高1までかけてゆっくり使用していく一部の大学附属校などに通う生徒の場合、季節講習を待たずに学期中より**完全別立てカリキュラム**で文法学習をどんどん進めていきます。また、④『**New Treasure**』Stage 3までを中学3年間でキッチリ終わらせる上位の中高一貫進学校に通うの場合でも、生徒の理解が優れていてさらに速いペースで英語学習を進められるようであれば、同じく学期中より**完全別立てカリキュラム**で文法学習をどんどん進めていきます。いずれも生徒の出来とご家庭の要望および学校の進度を鑑みて実施していきます。

(3) **補修型**：学校の授業についていけなくなってしまってから茗渓に入会した生徒や、あるいは英語を苦手としているような生徒の場合、まずは①入会後の当面の学期中は学校の授業進度に合わせて茗渓でも**並行指導**を行います。②いったん学校が長期休暇に入り次第、季節講習を利用して既習文法事項の**総復習**を実施していきます。とにかく学校の授業にしっかりとついていけるようになることが急務です。学校で「わからない授業」を聴き続ける状態に陥ってしまうと、クラスメートがどんどん先へ進んでいく中、自分一人だけ授業時間分を丸々無為に過ごすということになります。無駄だとわかっていても出席日数に関わるため欠席するわけにはいきません。また、遅れを取り戻すべく行う学習の時間は学校外で別途作らなければならないわけですから相当大きなハンデになります。そうした**悪循環**からは早急に抜け出すべく策を講じる必要があります。

(4) **変則型①**：まだ学校の部活動などを優先していて先行学習を特に希望しない生徒の場合は、学期中は学校授業と並行して学習を進めていき、部活の練習などで制約が大きい季節講習では**無理のない範囲で**前学期学習内容の復習と次学期学習予定の内容の予習を行なっていきます。

(5) **変則型②**：鉄緑会や駿台などの大手予備校と茗渓を**併用**している場合、その塾のカリキュラムと調整を図りつつ学習を進めていきます。例えば文法学習は他塾の方で進めていき、茗渓では長文読解の過去問や自由英作文などの実践演習を中心に実施していく、といったことも可能です。

ベースとなる**先行学習**は、中学１年より茗渓に入って本格的な英語学習を開始した生徒の場合、以下のような順序で進めていきます：

時期	学習内容
中１ ⋮ 中２	英語文章を読むのに必要最低限な基本文法事項を公立中学卒業レベルまで（＝関係代名詞まで）**一気に先行学習**します。夏休みなどの長期休暇期間を利用すれば早くて中２の夏から冬までには一通り網羅（もうら）し終わります。
中２ ⋮ 中３	基本英文法を一通り学習し終えたら、その後は文法学習はしばらく中断して、英検３級および準２級合格まで**長文読解演習**（英検過去問の読解演習）と論述演習（英検過去問の**自由英作文**）に入ります。
中３ ⋮ 高１	英検準２級に合格したら、文法学習を再開して高校英文法の基本項目の先行学習（仮定法まで）に取り掛かります。 高校英文法の基本項目を一通り網羅したら、英検２級受験に備えるべく再び読解演習と論述演習に入ります。 英検２級合格後より、①大学受験を目指す**進学校生**は本格的な大学受験準備に取り掛かっていきます。まずは大学入学共通テストの過去問を実施していきます。並行して大学受験レベルの特殊構文、文法語法問題対策や英文解釈演習および既習文法項目の復習も行なっていきます。②内部進学を目指す**大学附属校生**は学校の定期試験対策をしつつ、英検準１級あるいはTOEIC受験対策を開始します。
高２ ⋮ 高３	①進学校生は、大学入学共通テスト過去問で９割以上取れるようになってきたら、英検準１級対策、英検１級対策、あるいはMARCHレベルの私大一般入試問題、中堅国立の二次試験の過去問に取り組んでいきます。その後は志望校および同レベルの大学の過去問演習に取り組んでいきます。②内部進学を目指す大学附属校生は、引き続き学校の定期試験対策をしつつ英検準１級、英検１級あるいはTOEIC受験対策を行なっていきます。

上述の進度は**あくまで目安**です。生徒個人個人により学習ペースは異なりますので、**オーダーメイドで指導計画は立てていくことになります**。指定校推薦を目指す進学校生の場合は上述の大学附属校生寄りのカリキュラムに、そして外部受験を目指す大学附属校生の場合であれば上述の進学校生寄りのカリキュラムになります。

基本方針としては、英検準２級と英検２級の合格を境目として**文法学習と読解演習を交互に切り替えて期間実施**していきます。昔ながらの一般的な受験英語学習法では、まずは単語と文法をしっかりと固めてから長文読解演習に入ります。しかし、単語や文法**だけ**を文章から乖離（かいり）させて独立した**クイズや公式のごとく専用の参考書で機械的に詰め込むような学習**のみを長期間行うのは、良い学習法ではないと私は思います。（仮に英語学習を大学入試で効率的に点数を取ることのみに特化した手段として割り切ったとしても。）なぜなら**単語はあくまで文の一部であり、文は文章の一部**だからです。いずれも「文章」という全体の中で、他の各要素と築（きず）く関係性の中で統合的に用いらて初めて、これらは意味を持ちます。仮にある英単語に日本語で相当する語（訳語）をうまく割り当てることができたとしても（単語集で一対一で掲載されているように）、その訳語の日本語文章内での用いられ方と元の英単語の英語文章内での用いられ方には往々（おうおう）にして**ズレ**があり、時には意味が逆転することさえあり、せっかく身につけた単語知識が文章を読解する際に障害となることすらあります。

例えば日本語の副詞「どう」には英語の疑問副詞「how」が相当しますが、「君はどう思う？」を「How do you think?」と訳すのは誤りになります（正しくは「What do you think?」）。また英語の動詞「bore」は「（他人を）退屈させる」の意の他動詞で、「（自分が）退屈する」の自動詞の意味では用いられません[1]。「Tom bores Mary.」であれば、あくまでトムがメアリを（つまらない話でもして）退屈させているのであって、トムがメアリのことを退屈に思っているわけではありません。この違いを正確に把握しないで、単語帳の太字の見出し訳だけ見て「bore＝退屈…」と漠然と記憶していると、文章読解の際に「退屈している人」と「退屈させている人」を**逆に取ってしまう**（ひいては話の展開をまるっきり逆転させて誤読してしまう）**可能性**があります。

とは言え、やはりそれなりの体を成した英語文章を読むには（赤ん坊でもない限りは）事前にある程度のまとまった分量の語彙と文法知識は頭に詰め込んでおく必要があります。そこで上述のように、まずは中学英文法の学習より開始して、その終了後に一旦区切りをつけてから読解演習期間を設ける形にしています。

[1]日本語の「退屈する」に直接対応する動詞は英語には存在しません。英語で「（自分が）退屈する」と言いたい場合にはbe動詞（またはget/become）と他動詞「bore」の過去分詞を組み合わせて受動態を形成して「Tom is bored.」とし、そこからさらにこの「bored」は一般には分詞形容詞（ＳＶＣのＣ）の扱いになります。逆に英語の他動詞「bore」に直接対応する動詞は日本語において存在せず、「退屈させる」という形で複合動詞「退屈する」の未然形「退屈さ」に使役の助動詞「せる」を加える形で表現します。

3 家庭学習の指導（宿題）

宿題に関しては、学校より早いペースで文法の先行学習を進めている生徒や、あるいは学校授業より英文法学習が相当遅れていて別立ての総復習が必要な生徒には、文法問題集（新中問、シリウス、リード問題集など）を一冊渡してそれを指導の進行と共に宿題実施させていくこともありますが、それ以外の場合は**基本、生徒側で特に要望がある場合にのみ出す**形です。

家庭学習に関しては、志望校合格（あるいは希望学部進学）に向けて**いつまでにどの問題集・参考書を実施していくか**などの、**英語学習の基本的な進め方を一通り指導**いたしますので、生徒はそれを参考に各自行なっていくという形になります。これは「何月何日までに何の問題集を何ページまで実施する」というような具体的な「課題」を講師が定期的に出してやったかどうかの確認を逐一行っていくというような徹底管理をするものではなく、あくまで講師のアドバイスを参考に生徒が自身の学習目標を明確に把握して、その学習に自身が割くことができる時間と労力を分析し統合的に判断した上で**能動的に行う**ことを基本としています。

講師は、生徒が茗渓での指導中に実施する演習のできから学習の進捗を判断して、家庭学習のアドバイスを適宜行っていきます。例えばＡ大学合格を目指す生徒が、この学年のこの時期にこのレベルの問題が解けないとしたら、学習が遅れている故この学習ペースのまま行くと合格は難しい、ということが分かりますので、その場合はそれを生徒に伝え、生徒はそのアドバイスを元に**学習方針を修正**していきます。

また、指導冒頭では後述のように**語彙小テスト**を毎回実施しており（点数を記録しています）、高校英文法の学習が終わった生徒に関しては**文法語法問題集の小演習**も実施していますので、その準備が**一種の「宿題」**の形にはなっています。これは、小テストで合格点を出せてさえいれば、つまり要求されている知識をちゃんと身につけられてさえいれば、書き取り練習であろうと音読練習であろうと**その準備のために生徒が家庭で具体的に何をどの程度実施しているかは問いません**。（無論小テストの点数自体は一応の目安でしかなく、その後に出題範囲の語彙を全て忘れてしまうようでは意味がありません…あくまで「少なくとも大学受験期まで持続する知識の習得ができていれば及第」ということです。）暗記学習のアドバイスは講師側よりいたしますが、それをいかに具体的に実践していくかは生徒次第です。

同分量の知識を身につけるのに10分程度の準備で十分な生徒もいれば、より長い準備時間を要する生徒もいます。暗記物がいかに苦手な生徒であっても他の学習や生活に支障をきたすような準備時間や労力を要するような出題範囲は課していませんので（**生徒のリクエストに応じて出題数や出題形態を調整いたします**）、そこは何とか頑張ってもらえたらと思います。いずれにしろ、結果がちゃんと出ているのなら、つまり知識がちゃんと身についているのであれば、**そこに至るまでの過程は問いません。重要なのは学習の「質」であって「量」ではない**からです。

同分量の知識を身につけるのに人の２倍の時間と労力を要する地頭の人であれば、①何とか工夫して学習法を改善し効率アップを図るか、それが無理なら②根性で実際に人の２倍以上の努力をするか、あるいは③他科目学習のことも考慮に入れ総合的に判断し、英語の語彙学習にばかり時間と労力を割くことはできないゆえに妥協するか、のいずれかになります。**その判断を自分で行い**、能動的に学習計画を進めていくスキルを身につけることは、学科の学習自体と同じかあるいはそれ以上に（ひいては大学卒業後の人生においても）重要なことになります。

語彙小テストは自己採点で実施しますが、文法語法問題集のチェックテストに関しては講師の方で採点し、間違っている箇所から必要な復習範囲などを適宜指示し、復習用プリントなどもその都度生徒に渡していきます。

4 指導の役目

中学受験までは、まだ生徒が年齢的にも未熟であるがゆえ、保護者あるいは学習塾講師がしっかり管理して勉強させられるというのは大きなアドバンテージになります。一方、大学受験においては、**生徒自身が自主的かつ計画的に学習ができなければ難関校合格はまず無理**です。個別であれ集団であれいかなる形態であれ、通っている予備校の授業中や家庭教師についている時間だけちゃんとやっていれば大丈夫と全て丸投げでどうにかなることはまずありません。茗渓での指導は基本一科目につき週一回２時間ですが、これだけで英語や数学の学習が全て充足し成績がうなぎのぼりになるということは無論ありません。茗渓の指導で学んだことは、生徒が各々(おのおの)それを元にしっかりと家庭で復習をして初めて活(い)かされます。

志望校に合格するのに必要な（あるいは希望する学部に内部進学するために必要な）「**学力**」は、単純に以下のような式で表せます：

「学力」 ＝ 学習量（時間） × 地頭（知能） × 学習法

学習量とは、生徒が行った学習の量のことです。「１日１２時間勉強する」と言うのは容易いですが、１年以上の長期間に渡って毎日継続して長時間学習していくには相当な根気と体力が必要です。これは持って生まれた才能や気質に依るところもありますが、生徒が**精神的に成長**することで「今の自分にとって何が必要であるか」をしっかりと意識できるようになれば、己を律して辛い勉学にも長時間耐えられるようになることは十分可能です。特に英語においては**語彙育成に相当量の時間を要する**ことになります。定期試験ごとなど散発的に一夜漬けするような学習ではなく、普段から**継続的に相当量の語彙暗記をする習慣を身につけることが重要**です。単語や熟語の知識がゼロであればいくら頭の回転が良かろうと英語文章を読むことはできません。文法は参考書や問題集などを通して学習していきますが、これも「知識を増やしていく」という点では語彙力養成と同じく**地道な作業**を要します（文法学習に関しては詳しくは「文法の先行学習」の節をご覧ください）。

地頭とは、学習した内容を生徒の脳が速やかに消化していく能力（暗記力）、および学習した内容を問題実施の際に効果的に応用する能力（応用力）のことです。例えば同じ１週間という学習時間を費やして50語の単語を暗記しようとしても、その50語全てをしっかり暗記できてその１週間後、１ヶ月後、１年後まで何もせずともずっと記憶が100%定着している博覧強記な人もいれば、最初の１週間で覚えたものの20%ほどを忘れてしまい、その後何もしなければ１ヶ月後にはさらに半分近くの記憶量が失われ、１年後にはせっかく覚えた単語が全てきれいさっぱり頭の中から無くなってしまう人もいます（つまり**同じ時間を学習に費やしても、暗記力の違いにより暗記できる分量が生徒により異なる**）。また、普段から日本語でも英語でもたくさん本を読んでいる人や、あるいは生まれつき理解力に優れている人は、少々自分の知らない単語や表現が文中に出てきても前後の文脈から的確に推察して文章全体の意味をしっかりと把握できるのに対し、普段あまり文章に触れない生活を送っている読書嫌いの生徒の場合、知らない単語に遭遇するとついそこに拘りすぎてつまずき文章の全体像がうまくとれなくなったりします（つまり**覚えている単語・熟語の数が同じでも、読解力の違いにより読解できる文章レベルが生徒により異なる**）。

これは単純な頭の良し悪しだけの話ではなく、例えば数学や物理など理系分野の抽象的・論理的思考には長けているが複雑なニュアンスや蓋然的な暗示などを含む文学・哲学的文章理解や暗記物は苦手だ、といった分野ごとの得手不得手の現れである場合もあります。コツコツ型の人や「テスト本番に強い」人といった性格・気質の違いもあります。いずれにしろ、こうした**生まれつきの格差は如何ともしがたい現実として存在する**わけですが、全ての分野において天賦の才に恵まれた超人はそういません。肝心なのは、**自分のユニークな能力・特性をしっかりと見極めてバランスよく学習し、努力により短所を克服し、長所を伸ばしていくこと**です。

学習法とは、学習方法の効率に関するものです。同じ地頭の生徒が同じ時間を学習しても、その内容が学習目的に沿うものであるかどうかで結果は大きく変わります。例えば英語科目に割り当てた計500時間の学習量を全て英単語暗記に費やした場合と、語彙・読解・文法・語法・リスニング・自由英作文とバランスよく割り当てた場合とでは、当然後者の生徒の方が学力は伸びます。あるいは、大学受験生がビジネス方面に特化した英語資格試験であるTOEIC対策単語集を複数回回しても時間対効果は当然良くありません。

例えば100の学習量を実施した暗記力0.8、応用力0.8の生徒Ａが64（＝100×0.8×0.8）の学力を備えている（つまり学習した内容100のうちの８割を習得できて、さらにその身につけた内容のうちの８割を実際の問題実施で効果的に生かすことができる）とします。志望する大学の合格ボーダーが学力70を要する場合、この生徒は力足りず不合格の憂き目にあいます。これに対し、記憶力がより優れている生徒Ｂは、同じ学習量100を費やしたとしても持ち前の記憶力を発揮して効率的により多くの知識量を身につけられます。あるいは応用力がより優れている生徒Ｃは、同じ知識量であっても機転を利かせて己の知識量を遥かに超えるようなレベルの文章でも難なく読めてしまいます。そうした生徒Ｂの暗記力を0.9、生徒Ｃの応用力を1.2とすれば（共にその他の能力は同じとした場合）、彼（女）らは共にこの大学に合格することができます（100×0.9×0.8 ＝ 72 ＞ 70； 100×0.8×1.2 ＝ 96 ＞ 70）。

では、生徒Ａはこの状況においてどうすれば良いのでしょうか。持って生まれた地頭の差**自体**はどうすることもできません。まずは①英語学習に**人一倍時間と労力を費やして弱点を克服する**という選択肢があります。学習量を単純に２倍にすれば記憶力の不足を補うことができます（200×0.8×0.8＝128で）。問題文中で使用される語彙の８割程度知っているくらいでは設問正答率が低いのであれば、使用語彙の９割５分がわかるレベルまでとことん語彙量を増やしていけば、いかに理解力において劣ろうとも楽にその文章を読解できるようになるはずです。あるいは普段の読解問題演習量を増やして読解テクニックを身につければ、持って生まれた理解力も鍛えられてある程度は向上するかもしれません。しかし、いずれの手段を取るのであれ相応の時間と労力を要することになりますので、他の学科の学習にも当然しわ寄せが来ることになります（英語だけ合格ボーダーを超えても、それで学習時間の減った他学科でのマイナス分を補えないようでは意味がありません）。

あるいは②志望する大学のレベルを下げることも視野に入れつつ、自分は暗記モノや読解モノは苦手なタイプの人間だから人は人、自分は自分のペースで学習を続けていくという**現実との和解**も選択肢の一つです。

これは、どちらの選択が正解ということはありません。いずれにしろ、**何も考えず、何もせずに、ただ「私は英語が苦手だ…」と漠然と嘆いていても何も変わることはありません**。現在の学習量で思うように成績が伸びないのであれば、まずは**自分の現状をしっかりと分析した上で、計画を立て具体的な行動をおこしていく**ことが重要な第一歩になります。

生徒Ａは、③学習法面で予備校や家庭教師のサポートを受けることで限界突破することもできます（いわゆる「コーチング」）。私が講師として生徒の手助けができるのは主にこの面です。学習は**ただがむしゃらに量をこなすだけではあまり効果がありません**[2]。特に時間制限のある大学受験勉強の場合、いかに効率よく時間を使うかが成功のカギとなってきます。今はインターネットのおかげで様々な有益情報の入手が容易になりましたが、それはＩＴに精通し情報収集能力に長けた生徒に限られますし、ＩＴに精通するようになるのにも時間と労力は必要です。それゆえ、いつまでに何をどの程度勉強すればいいのか、自分のレベルは現在どのくらいなのか、事細かに即座に教えてくれることで**時間と労力を節約してくれる存在**はとても貴重になります。

担当講師が短期・長期の学習目標を生徒に示し学習計画を一緒に立てる。担当講師が指導を通して生徒のできを見て、ピンポイントで痒い所に手が届くように問題解説を行う。例えば英語の長文読解演習であれば、その文章中のどの文で躓くのかは生徒一人一人によって大きく異なります。生徒自身が「分からないところ」というのは、分かっていないわけですから（いわゆる**「分かっていないことが分かっていない」状態**）、自分一人ではなかなかうまく対処できません。そうした箇所で、講師の方から「この文の構文が取れていないということは、この文法の理解が足りていないということだから、この問題集のこの章を復習しなさい」といった具合に的確にアドバイスをすることで、**学習効率を上げるアシスト**をすることができます。（市販問題集には本文和訳は載っていますが、それ以上のことはあまり書かれていません；学校の教師に逐一質問に行くとなると結構な時間を要します。）あるいは、難関校の入試問題や英検１級レベルの文章問題を実施した際に、ネットでは容易に見つけられない、冊子に掲載されている簡素で通り一遍な解説よりもさらに深

[2]「勇気（courage、困難や危険を恐れない心）」は美徳の一つとされますが、その逆の「臆病（cowardice）」だけでなく「蛮勇（rashness、事の理非や是非を考えずに発揮する勇気）」もまた悪徳とされるのと同様、無計画なむしゃら学習には様々な弊害があります。

い解説が必要な場合には、生徒の要望に合わせて100％理解できるように解説を行うことができます。また、自由英作文のように、問題集冊子の模範解答だけ見ても埒が明かない、個別の添削が必要な分野においても大きな力を発揮します。

しかし、講師のそうした多種多様なサポートも、生徒の方でそれを元に復習することをしなければ全て無駄になってしまいます。講師の方で出す「いついつまでにどの参考書を実施するのが良い」「どの単語集をいつまでに何周するのが良い」といった家庭自習に関するアドバイスも、生徒が実践しなければ何の意味もありません。茗渓予備校では、中学受験塾や全寮制予備校のように生徒を長時間拘束し徹底管理するといったことまではしませんので、まったくやる気のない生徒に対してはあまり手助けをすることはできません。どんなに無気力で怠惰な生徒であっても圧倒的カリスマ性を発揮して魔法のような励ましの言葉で奮起させやる気満々の勤勉生徒に生まれ変わらせるといった芸当も残念ながら不可能です。無論、できる範囲で生徒のやる気を引き出すように私の方でも色々と努力はしますし、また講師と生徒で運良く相性が良かったりすると特に何もせずとも生徒の方からやる気を出して勉強を頑張るようになることもあります。しかし**最終的には、これは人から教わったり躾けられたりするようなものではなく、人として成長することで自ら意識して身につけていかねばならないもの**ではないかと私は思います。

生徒の学力も学校の入学難易度も偏差値１刻みで格付けされている中、少しでも「上の学校」を目指そうと思うのが人情ではありますし、また大学卒業後に少しでも有利な進路に進めるような学校に入ろうと考えるのは至極合理的な判断ではあります。しかし、偏差値１ポイントあるいは５ポイント上の学校に入ること自体よりも、受験を通して**自分の能力をしっかりと見定め、親から授かったそのポテンシャルを最大限に発揮すべく努力することを学ぶこと**の方が、後の人生を生きていくのにおいてずっと大切な財産になります。偏差値70レベルの生徒が勉学を怠けて偏差値60の学校に合格することよりも、偏差値60の生徒が自分のベストを尽くして実力相応の偏差値60の学校にしっかりと合格することの方が、ずっと実りのある「受験」だと言えます。私はその手助けを茗渓での指導を通してできればと思います。

5 文法の先行学習（グラマ）

茗渓で文法の先行学習を進めていくと、学校での文法授業は生徒にとって「復習」になります。①茗渓での先行学習、②学校の授業、そして③定期試験前の茗渓での復習と、同じ内容を**都合３回学習**することになります。

私の指導では、**英検準２級と２級合格を境目**として、大きく「中学基本文法」「高校基本文法」「大学入試文法」の３期に分けて英文法を学習していきます。

（1） **中学基本文法（公立中１～３年相当）**：①動詞（be動詞、一般動詞、三単現、複数形、使役動詞・知覚動詞）、②疑問詞疑問文、③助動詞、④接続詞、⑤時制（過去・未来）、⑥相（単純相・進行相・完了相）、⑦比較（＋中学範囲の関連応用構文）、⑧不定詞・動名詞（＋中学範囲の関連応用構文）、⑨受動態、⑩関係代名詞、⑪その他（間接疑問、付加疑問、命令文、感嘆文、存在構文）。

（2） **高校基本文法（公立高１～２年相当）**：①関係副詞、②複合関係詞、③分詞構文、④仮定法。

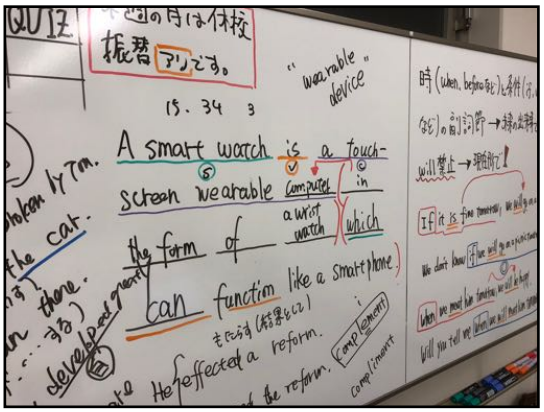
（3） **大学入試文法**：強調構文、倒置構文、その他特殊構文。

文法項目を学習する順番は厳密に上記の通りというわけではなく、例えばNew　Treasureなどの検定外教科書を採用している学校に通う生徒の場合であれば**その学校のカリキュラムに準拠した学習順**になります。

基本としては、まずは英語文章を読むのにおいて必須となる基本文法事項のみをかいつまんで先行学習していきます。細かい応用表現に関しては学校授業で扱われた時や読解演習で遭遇（そうぐう）するタイミングで学習していきます。例えば「分詞の叙述用法（predicative use、例：「We sat talking.」）」は、New Treasure使用校の場合、学校でStage 3 Lesson 9を学習する際に茗渓の指導でも学習します。

茗渓に途中入会された生徒で、学校の授業より文法理解が遅れている場合、学期中はまず次の定期試験に向けて試験範囲の文法学習に注力します。例えば中２の２学期に、学校ではこれから受動態の学習に入ろうとする頃に茗渓に入会した生徒で、中１の学習内容にすら不安があり現在の英語の成績も芳（かんば）しくない場合でも、いきなり中１の１学期分から総復習を開始したりせずに、当面は学校の授業に合わせて受動態の学習を行います。受動態理解において最低限必要になる動詞や疑問詞、助動詞の基本的な使用法などの理解が浅いと指導中に見受けられた場合にはピンポイントでそこを簡潔におさらいします。なんとかその学期の定期試験を乗り越えて学校の授業が一時停止する長期休暇に入ったら、季節講習で英文法の総復習を行なっていきます。学校の授業について行けるようになって余裕ができてきた段階で先述の先行学習モードに切り替えていきます。

文法指導では、まず講師（私）の方でホワイトボードに基本的な解説を板書した上で、説明を行います。生徒はそれを見て聞いて確認したら演習問題に取りかかります。重要な文法項目に関しては**オリジナルプリント**（ていねい）を使用しています。細かい文法解説についてはこれに全て事細かに書いてあるので、板書を記録用に丁寧（かい）にノートに書き写す必要はありません。ただ、見聞きするだけでなく手を動かして書くという作業を介したほうが知識の定着も早いので、そのために（ただし時間はあまりかけすぎずに）板書はノートに書いてもらうようにしています。



6 文法の演習問題

新規文法事項の導入指導を受けた後には、私の方で作成した**オリジナルの和文英訳形式の演習問題**を実施します。英文法はそれを使用して自分の考えを文として表せるようになって初めて習得できたと言えます。**並べ替えや穴埋めなどの「英語パズル」がいくらできるようになったところで意味がありません**。また、基本の和文英訳がちゃんとできるようになれば、どんなタイプの問題が試験で出されても対応できるようになります。例えば、関係詞の空欄補充問題を簡単に正解できるようにするためのテクニックというものがあります。このテクニックを使えば空欄の前後にどのような語が来ているかを確認するだけで半ば自動的に正答を見極めることができるのですが、こんなものはちゃんと関係詞の使用法をマスターしていて自分でも関係詞を用いてしっかりとした文がゼロから書ける生徒には一切不要なわけです。無論、高２、高３の本格的な大学受験準備期にはこうした**受験テクニック的なもの**も指導で教えていきはしますが、中学生から高１までの段階では、そうした姑息なテクニックよりも先に、まずは英語の地力を付けるためにも基本的な文法・表現の使用法を完璧にマスターさせることが重要です。

言語は、相手に意思を伝達するための手段だけではなく、根本的な思考のための道具でもあります。言語を介さずには複雑な思考は不可能です。日本人であれば日本語を使って物事を考えます。日本語を母語として生まれ育ち臨界期より後に英語を習得した人が英語を話す場合、最初は日本語で思考してそれを英語に直して口に出すという形になります。最終的には頭の中でも英語で物事を考えて、それを英語でそのまま言いあらわせるようになるのが理想ですが、外国語としての英語学習を開始したばかりの生徒がいきなりこれをやるのはさすがに無理があります。まずは第一歩として、日本語で考えたことを英語で表すための方法を学んでいきます。和文英訳演習は英語思考・英語発話に至るまでの「橋渡し」となります。

日本人が外国語として英語を学習する場合、日本語という下地がちゃんとあるわけですから**それをうまく利用しない手はありません**。かつて日本語は「欧米言語に比べて曖昧で非論理的である」という言説がまことしやかに出回っていたことがありますが、記号論理学があらゆる言語で可能なことを見てもわかるように、この世に「非論理的な言語」などというものは存在しません。英語であろうと日本語であろうと、主語や述語といった言語の論理的基本構造に変わりはありません。外国語を学ぶということは、単にその言語における文成分の並べ方（例：ＳＯＶ→ＳＶＯ）と機能語（例：格助詞「が」やbe動詞「is」）の使用法を習得して、そして各成分に入る新たな語彙（内容語）を覚える（例：私→I、英語→English、勉強する→study）というだけのことです。つまり、日本人の英語学習は、まったくのゼロからのスタートというわけではなく、すでに日本語を介して鍛え上げられた言語の根源的な使用法を拡張していく形になります。

先述のようにもし日本語も英語も論理的な基本構造が同じであるのなら、日本語で頭の中で考えてからそれを英語に翻訳して口に出せるようになるだけで十分であって、ネイティブのように英語で考え英語で話せるようになる必要は無いように思えます。しかし残念ながら、非ネイティブの人の英語習熟度が上がれば上がるほど、文法に厳密に則って作った表現であっても実際の会話や文章においては用いられない不自然なものになってしまうというケースに数多く遭遇するようになります。この段階になると、数学や自然科学のように**論理や理屈だけでは対処できなくなってきます**。「リンゴ」や「走る」といった基本レベルの内容語であれば一対一で対応する語がすぐに見つかりますが、より複雑な概念や言い回しになればなるほど直接対応する表現は存在しません。そうした高度な表現は、最初から英語で考え英語で文を作るという言語活動の延長において習得していくより他に、つまり日本語を介さず英語で英語の語彙を増やしていくより他に、身に着ける術はありません。

和文英訳演習は、**最初は**「日本語で考えたことを英語で表す」ための演習ではありますが、最終的には「英語で考えてそれをそのまま出す」というレベルに達するまでに用いる**補助輪**のような役割を担うものとして私は考えています。将来、通訳や翻訳家になるわけでもないのであれば、単なる英訳が得意になっても意味がありません。無論、茗渓予備校は第一義として進学校生の大学受験指導や大学附属校生の学校での学習を支援する予備校であり、一般的に英語を言語として習得することを旨とする場ではありません。しかし、入学試験の英語であっても学校授業の英語であっても、「英語」であることに変わりはありませんし、英語思考・英語発話はそのいずれにおいても大きなプラスになります。例えば**入試問題の英語長文を読む際、いちいち頭の中で日本語に訳して読解していくようでは相当な時間ロス**になります。上位校入試で出題される英

語文章は相当な分量になるため、悠長に精読している暇などありません。当然、**英語は英語のまま読んで理解できるようになることが必要不可欠**になります。英語と日本語とでは主語と述語の位置、修飾部の位置が大きく異なるため、英文を日本語として自然に文意を取ろうとすると後ろから訳していくということになりがちですが、これは避けなければなりません。個々の単語は日本語として頭の中で翻訳してしまってもかまいませんが（例：「I study English in the library in the morning.」→「私は、勉強する、英語を、図書館で、午前中に。」）、**あくまで文の各成分は英語の順番で頭にインプットしていき、日本語の語順にいちいち並べ替えさずともそのまま理解できるようになる**ことを目指します。

これは英文を書く際も同様です。いきなり英語初学者が英語で考えた内容を英語で書くというような芸当はできませんので、まずは日本語で書く内容を頭の中で考えている段階から、日本語の単語を英語の語順で並べていくようにしていきます（例：「私は、午前中に、図書館で、英語を、勉強する。」→「私は、勉強する、英語を、図書館で、午前中に。」…言わば漢文の訓点と逆方向の作業です）。そうして頭の中が日本語と英語がチャンポンの状態を作ってから、少しずつ語順も語彙も英語ものへと変えていき、最後には**全てを英語で考え英語で文を作る**というところまで持っていきます。

私が作成している和文英訳演習の設問の和文は、一般的な和文英訳問題とは異なり、学習中の文法事項の基本さえマスターしていれば容易に英語へと直訳できるように作成されています。元になっている英文には英語の書籍や新聞記事などより直接引いてきた「本物」の英文もあるため、一部難易度の高い語句も含まれますが、そうした語句には全て注釈を付けてありますので、生徒の方ではその時学習中の文法規則に沿って語句を並べていけば良いだけになっています。（注釈を通して**間接的な語彙力養成**も見込んでいます。）和文は各成分が英語のＳＶＯＣに直接対応するように書かれているため、日本語としては一部響きが不自然なものもあります。例えば日本語では省略されがちな主語や定冠詞theは全て書き出されています。これは文の各成分の配置をしっかりと認識させることを最優先にしているためです。日本語で主語・述語・修飾部などの文の成分をしっかりと認識できるようになれば、後は各成分に対応する語を英語に直したものを学習した英文法に従って並べれば英文は出来上がります。この演習を通して日本語と根本的に異なる英語の語順・文構造を徹底的に頭に叩き込むことを目指します。文の成分の意識付けがしっかりできたならば、英語を英語のまま読む段階も、英語で考えたことをそのまま英語で発する段階も、もうすぐそこです。

検定外教科書は学習ペースが早いだけでなく、文法事項を学習する順番も一部変則的になっています。例えば「in order to」の表現は教科書『New Treasure』だと不定詞導入回になるStage 2 lesson 4でいきなり出

てきますが、この表現は公立校であれば高校に入ってから不定詞の応用表現として学習するものです。市販の一般的な中学生向け問題集には基本含まれていません。また、高校生向け文法問題集を用いると、中高一貫生とは言えさすがに中学２年の段階では未修の高校レベルの文法事項も組み合わされた演習問題が出てくるため、適していません。また、「in order to」は本来「不定詞の応用」セクションの一部で扱われるものですから、これのみをピンポイントで学習するための演習問題数はそう多く掲載されていせん。

あるいは教科書『Progress in English』ですと、関係代名詞をBook 2 Lesson 5で、現在完了、受動態、分詞の形容詞的用法他よりも先に学習してしまいます。関係代名詞は公立中学では中学英語の一番最後に学習する文法項目ですから、それに準拠する市販の中学生向け文法問題集に載っている関係代名詞の演習問題にも当然、現在完了他の文法事項が組み込まれた問題が出てきますので、ProgressのBook 2 Lesson 5をちょうど学習している最中の中高一貫校生には適していません。こうした難点を補うべく、私の方で作成している和文英訳教材は、その文法事項を学習する中高一貫校生が既習の文法事項のみを使用した問題作りになっています。

追加演習および文法項目を復習する際には新中問やシリウス、リード問題集などを使用して穴埋めや並べ替え、和訳問題なども実施します。

添削は私の方で行います。間違えた箇所(かしょ)を生徒本人と共に確認し、まだ理解が浅い場合は改(あらた)めて解説を行なったりします。覚えて多くべき派生表現などがあれば私が逐一(ちくいち)板書し、生徒はそれをノートに書き写します。

7 長文読解演習（リーディング）

読解力を養うには大量に英語文章を読み込んでいくより他に手はありません。語彙ゼロ、文法知識ゼロでは英文を読むことは無論できませんが、逆に文法を学習するだけ、単語・熟語を覚えるだけでもいつまでたっても本格的な英語文章を読めるようにはなりません。読解演習はまた、長い英語文章を読んでいく際に単語帳で見た単語に遭遇したり、授業で習った文法の実例に触れていくことで、参考書冊子で詰め込んだだけの知識を改めてしっかりと定着させることができるという相乗効果ももたらします。

また、文法は応用・例外が際限なくあり、語彙も極めようとすれば青天井のようなものでキリがありません。中高一貫生の場合、高校受験もなく大学受験まで時間もありますから、まずは大学受験レベルの文法・語彙まで全て一気に身につけてから読解演習に取り掛かるというようなことも可能ではありますが、これは効果的とは言い難いとても歪な学習法であると思われます。やはりどこかで頃合いを見て読解演習を適宜実施していく必要があります。

中学校の英語授業の場合、読解演習と文法学習は並行して行っていく形になります。教科書に出てくる英語文章は、それまでの授業で学習した文法と語彙知識だけで読むことができるように書かれており、これが各文法事項を学習し終える度にアップグレイドしていく形です。中学生対象の一般的な進学塾の場合、授業はもっぱら文法学習が中心で、高校受験の過去問演習に入ってから本格的な読解演習を行っていきます。

私の茗渓での指導では、上の「指導計画（長期計画）」のセクションで述べた通り、まずは文法学習をある程度進めて基礎的な英語文章を読み切れるくらいの文法知識と語彙力が定着させたら、集中的な読解演習をしばらく実施していく形にしています。英検３級から準２級レベルの基本的な英語文章の読解ができるようになったら、残りの高度な高校英文法の学習を済ませて、その後は大学入試問題レベルあるいは英検準１級レベル以上の読解演習を行いつつ細かい文法・語法知識を並行して少しずつ学習していきます：

時 期	学 習 内 容
英語学習開始期	まずは基本的な中学英文法と語彙の学習をして、英語文章を読むための下地を作っていきます。幼少期から絵本レベルより多読によって英語学習を進めるような子の場合は本格的な文法学習や単語集を使っての別途語彙力養成などせずともある程度の英語文章が読めるようにはなりますが、一般的な中学１年生の場合は語彙力ゼロ・文法知識ゼロの下地無し状態からいきなり読解演習にとりかかるのには当然無理がありますし、非効率的です。
英検３級 ⋮ 英検準２級	中学英文法をざっと履修して基礎語彙力が身についたら、**最初の読解演習期**に入り、大量の英文を読み込んでいきます。英検準２級は高校英文法も出題範囲に含みますが、英検では大学入試のように文法プロパァを問う問題は少ないので（あるとしても適語選択で１問か２問程度）、このまま準２級まで一気に合格を目指します。
英検２級	高校英文法の履修後に英検２級の過去問演習に入ります（**２番目の読解演習期**）。英検２級レベルでも語彙力と地の読解力だけで押し切れる生徒はいますが、長文中には仮定法や関係副詞などを用いた表現が普通に出てきますので、まずはしっかりと高校レベルの基礎文法知識を身につけた上で長文問題に臨むのが理想的です。 英検２級合格までは、基本、**語彙学習と最低限の基本英文法学習だけ**で合格を目指していきます。英検読解演習中に難解な構文などに遭遇した場合はその都度私の方で解説を入れていきますが、大学受験レベルの細かい文法語法知識や英文解釈などについてはこの段階ではまだ取り組みません。**英検２級までは、小手先の受験テクニックなど弄せずとも、単語帳で覚えた語彙と英文をたくさん読み込んで鍛えた地の読解力だけでガチンコで合格**できなければなりません。

共通テスト （旧センター試験）	英検２級に合格したら、進学校生は大学入学共通テスト（旧センター試験）の過去問に取り組んでいきます（**３番目の読解演習期**）。共通テストは読解問題の難易度的には英検２級と同程度ですが、英検２級が６割程度得点すれば合格するのに対し、共通テストでは６割取ってもちょうど平均点あたりで日東駒専レベルの合格にも及びません。まずは共通テスト読解問題で満点、総合で８割の得点率を目指して過去問演習を実施していきます。旧センター試験の適語選択・整序問題を手始めに文法語法・イディオムに関しても入試レベルの演習を開始します。 大学附属校生は、英検２級合格後は英検準１級やＴＯＥＩＣ受験対策を行なっていきます。準１級は２級より難易度が格段にはね上がるので、いきなり準１級の過去問演習は始めずに、しばらくは２級の問題を継続使用して語彙セクションも含めて８割以上の正答率に達してから準１級対策に移ります。英語の得意な生徒や、家庭でも英語学習を相当行なっているような生徒の場合は、早い段階で準１級対策に移る場合もあります。
国立二次試験 私立一般入試 英検準１級	進学校生は、大学入学共通テスト（旧センター試験）過去問の読解でコンスタントに８～９割近く得点できるようになったら、国立大学の二次試験、私立大学の一般入試問題に取り組んでいきます。早慶以上のレベルの大学を目指す生徒の場合、再び英検に戻って準１級合格を目指して過去問演習を行なっていく場合もあります。 大学附属校生は、引き続き英検準１級や１級、あるいはＴＯＥＩＣ受験対策を行なっていきます。

指導内での読解演習の取り組み方には主に２つあります：

(1) **多読（extensive reading）**：自分の現在の英語力でその英語文章がそれなりにスムーズに通して読める場合、問題プリント/冊子に直接書き込み実施し、できる限り多くの演習量をこなすように行なっていきます。英検４級～２級および大学入学共通テスト（旧センター試験）過去問までは基本この形式で実施していきます。英検は各級ごとに過去10年分（年３回実施）の計30回、共通テスト（旧センター試験）も過去10年分（本試験・追試験の年２回）20回分の過去問を実施すれば相当読めるようになってきます。

(2) **精読（intensive reading）**：英検２級合格後に英検準１級の過去問に取り掛かり始めて間もない頃や、志望校の過去問に取り組んでいる場合、**問題をコピーしてノートに貼り付け丁寧に実施**していきます。設問に対する解答もノートに書いていき、本文中の読み取れなかった難しい構文の文などは書き出して私の方で板書で解説していきます。

設問の採点は私の方で行います。生徒の本文理解が浅いと見受けられる場合は、**本文を生徒に訳読**させます。先述のように、本来なら英文は訳さず英語のまま読んで理解していくのがベストなのですが、生徒が英文をちゃんと理解しているか確認するには和訳をさせてそれを確認せざるを得(え)ません（授業を全て英語で行う場合、文を自分の英語で言い換えるパラフレーズをさせるという方法もありますが、これは日本人中高生にはさすがに困難です）。

訳読の際、ＳＶＯＣはできる限り英語の語順のまま口頭で訳させ、間違っている箇所(かしょ)はその場で訂正していきます。例えば「Marketing companies need to identify the colors that can create an intention to purchase and a desired atmosphere in retail stores.」という文であれば：

Ⓢマーケティング会社は / Ⓥ～を特定する必要がある / Ⓞ色を / Ⓜ購買意欲を生み出せる（色を） / そして / Ⓜ小売店内の望ましい雰囲気を生み出せる（色を）

といった具合に訳していきます。従属接続詞の後置修飾節は前に繰り上げず、その元の場所に置いたままで訳していきます。前置詞句や関係詞節はさすがに英語の語順のままでは聞いても分かりづらいので、最初に英語の語順でその部分を読んだら、その後あらためて修飾部を被修飾部の前に順次積み上げていく形で訳します：

The car which Tom purchased last year....
↓
その車は…
↓
トムが購入したその車は…
↓
去年にトムが購入したその車は…

文後方にある修飾部を先に訳すなどして日本語として自然な文になるように頭の中で整理し直す必要がないので、生徒は頭からから**パッパッパと英語の語順で訳していく**ことになります。日本人が日本語の文を読んだら、いちいち時間をとって読んだ内容を反芻せずともそれを読み終わった時点でもうその文意を理解できているのと同じです。だから、私の方でも待たずに生徒を**急かしていきます**。わからない単語はその場で私の方で即教えますので、それでもつまずいてしまう場合というのは、しっかりとＳＶＯＣの構造がとれていない時ということになります。その際は私が文構造を解説します。訳し間違えている箇所について私が模範訳を示す場合は、ＳＶＯＣや修飾部の切れ目にスラッシュ（／）を書き込んで、生徒に文構造をしっかり目で見て取れるようにしていきます（スラッシュリーディング）：

Marketing companies / need to identify / the colors that can create [an intention to purchase] and [a desired atmosphere in retail stores].

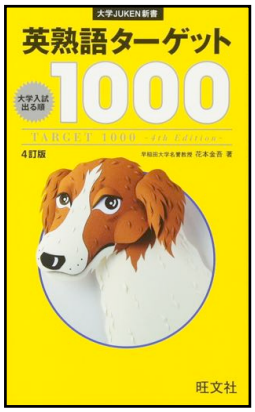
また、個々の単語の意味がわからない場合でも、その部分はカタカナ読みのままで訳させるということも時にさせます（例：「I studied English.」→「アイは、スタディした、イングリッシュを。」）。これは、仮に単語の意味がわからなくても文の構造を把握できていればその意味の推測が容易になるので、それを確認させるためです。例えばある未知の語に「～ed」が付いていれば過去形の動詞の可能性が高くなり、その前の主語の位置とその後の目的語の位置に入る語は名詞である可能性が高いといったことがわかります。これに加えて前後の文脈をつかめれば、意味を推察することがずっと容易になります。

逆に、なまじ個々の単語の意味を知っていると、文構造がしっかり把握できていない場合でもそれを無視して、**個々の訳語が日本語として頭の中で自然な文を形成するようにうまく並べて訳してしまう**ということを生徒がしてしまう場合があります。**これは極力避けなければなりません**。その文単体の理解に関してはそれでも大きな問題が生じないことが多いですが、そうした形で少しずつズレや曖昧さが生じてくると、長い文章を最後まで読んでいった時にそれがエントロピーのごとく蓄積していき、文全体としては分かったような分かっていない曖昧な状態になってしまうことがあります。これを防ぐためにも、極力、文構造を正確に把握できる限りはしっかり把握した上で読解していくことを心がけます。

読解演習中に遭遇した分からない語彙や、読み取れなかった構文、理解の浅い文法などが判明した場合には、その都度**手持ちの単語帳**（『英単語ターゲット1900』など）、**熟語帳**（『英熟語ターゲット1000』など）、**文法語法問題集**（『Vintage』など、後述）**を開いて当該箇所にチェックを入れていきます**。語彙や文法・語法は各種参考書を使用して別途学習していますが、**その身につけた知識が読解演習においてちゃんと活かせているかを確認**して、できていない場合にはその単語・熟語が具体的に実際にどういう文脈で使用されるのかを頭に入れていきます。

8 語彙学習

語彙（＝人の使う語の総量）力は、大学入試における適語補充問題などの語彙を直接尋ねる問題はもとより、長文読解においてもたいへん重要です。語彙の育成は、実際に英語文章をたくさん読んだり、書いたり、あるいは英語のテレビ番組や映画、ラジオで聞いたり英会話で話すことを通して身につけていくのが自然であり理想的ではありますが、こと英検や大学入試などの試験対策となると単語帳・熟語帳を使用してコツコツとまとめて覚えていくことを並行して実施していくのが効果的です。私の指導冒頭では**毎回、語彙（英単語・英熟語）テストを実施**しています。講師の方から語彙集をあらかじめ教材として渡しますので、生徒はそれを使用して家庭学習を行いテストに備えます。テストは指導冒頭ですぐに開始しますが、準備が間に合わなかった場合や、あるいは定期試験や英検受験直前期などの場合は、実施せずに次回以降に持ち越しにすることもあります。また、学校の方で語彙テストを実施していてその負担が大きい場合や、あるいは語彙学習は自力でできるという生徒の場合には、語彙テストを無しにすることもあります。また、家でちゃんと語彙テストの準備をできない生徒の場合、苦肉の策として、10分ほど書き取り練習の時間を取ってからテスト実施をすることもあります（書き取り練習時間は指導時間内にカウントしません）。ただ、もし時間が無いのであれば、できれば指導前に少し早く来て自習室で語彙テストの準備をするのがベタァです。



中１の英語学習スタート期には、①基本英単語（曜日や季節、身体部位、家族、果物、国名などの単語…講師の方で作成したオリジナル語彙リストを用います）で単語テストを実施します。その後は②学校で使用している英語教科書のLesson　4、5あたりまでに出てくる語彙でテストを行ない、それ以降は単語帳に切り替えていきます：③パス単３級→④パス単準２級→⑤英単語ターゲット1900（＋英熟語ターゲット1000）/システム英単語/パス単２級→⑥パス単準１級/TOEIC金のフレーズ→⑦パス単１級。基本は**高校で使用する（ことになる）単語帳と同じもの**を使用して単語テストを実施します。

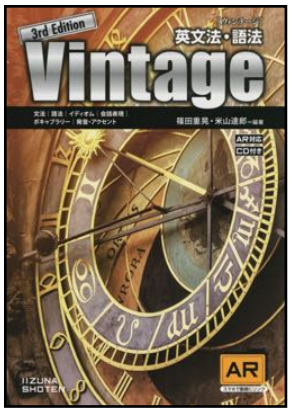
語彙テストでは、単語/熟語の綴りを書かせる問題が毎回50問出題され、間違えた語彙は全て次回テスト時に繰り越し再出題されます。例えば単語集001番～050番が試験範囲で、そのうち003番、008番、014番、028番、049番の５問が不正解だった場合、これら５問が次回テストでも再出題され、残りの45問分は新しい語彙（051番～095番）に置き換わります。同じ語彙を再び間違えた場合には、正解するまで再々出題、再再々出題…されます。正解数が半分未満の場合は、正解分も含めて全問再テストになります。

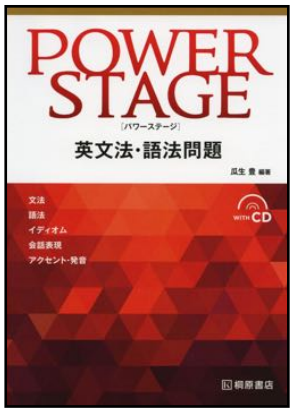
生徒のリクエストに応じて、毎回100問出題や、綴りではなく意味を書かせる問題などに変更することも可能です。

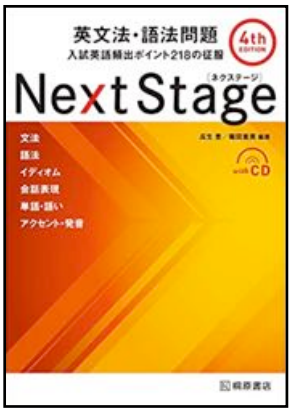
9 語法対策

進学校生は、英検２級まで合格した後の本格的な大学受験勉強に取り掛かる段階より、語法問題対策を指導内に取り込んでいきます。「**語法**（word usage）」とは、先述の文法（grammar）と重なる部分もありますが、要は個々の単語や熟語の使用法のことです。例えば「次の文のカッコ内に適切な前置詞を入れよ：He was told（　　）the doctor to give up smoking.」という問題は典型的な**文法問題**になりますが、「The new building deprived their house（　　）sunlight.」という問題であれば**語法問題**の分類になります。前者は、「受動態」という文法事項で学習する「be動詞＋過去分詞 by 〈行為者〉」という基本形式を理解していれば容易に正解することができます。これは中学生用の文法参考書でも一つの章を割いて掲載されるくらい基本的な事項です。これに対し後者は、「deprive 〈人〉 of 〈物〉（〈人〉から〈物〉を奪う）」という、意味的には間接目的語になる目的語と意味的には直接目的語になる「前置詞付き目的語（prepositional object）」を取る動詞になります。これは、一般に、clear、cure、robなどの同じ形式を取る他の動詞とセットでまとめられて『Vintage』などの英文法語法問題集（後述）の「動詞の語法」の章に掲載されています。こうした熟語は文法参考書の「受動態」や「関係詞」といったような主要文法事項の章にはまず掲載されていません。『英熟語ターゲット1000』などの熟語集には無論掲載されていますが、熟語集では各熟語が出題頻度順で並べられているため、同系列でまとめられてはいません。この手の熟語に関しては、文法語法問題集の「動詞の語法」で系統的にまとめられたものを利用して学習するのが最も効果的です。

市販の**語法問題集**としては『Vintage』『Scramble』『Next Stage』『Power Stage』『Upgrade』などが広く使用されています：



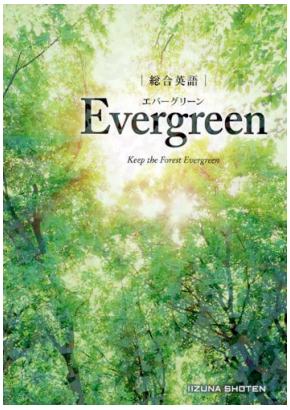


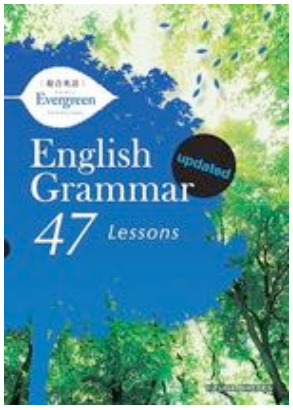


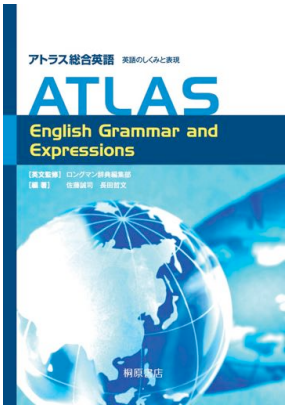
いずれも表題に「**英文法・語法…**」とあるように、この類（たぐい）の問題集は①前半には時制、受動態、仮定法といった主要文法項目に関する問題を掲載（けいさい）し、②後半で動詞や名詞などの細かい語法の問題を掲載しています。中身は、見開き左側ページに穴埋めの四択形式または並べ替えの短問が数題掲載されていて、右側ページに各問題に対する解答と簡潔な解説が掲載されている内容が数百ページにわたり掲載されています。

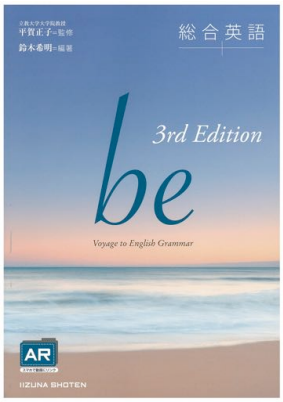
文法語法問題集を使用した学習は、基本、単語・熟語の語彙学習と同じく、頭に知識を詰め込んでいく形になります。

なお、文法語法問題集前半に掲載されている文法セクションに関しては、導入用の基本解説は掲載されておらず、各文法事項の細かい派生表現や例外的表現が中心になっています。そのため、基礎レベルの文法理解に不安があるような生徒の場合には、まずは『Evergreen』や『be』『Atlas』『チャート式総合英語』などの「総合英語」参考書を読んで英文法の基礎を総復習して、その準拠問題集あるいは別の初級レベルの薄い文法問題集を用いて演習実施して基礎を固めておく必要があります。（茗渓での私の文法学習指導においては、上述の通り、オリジナルプリントを中心に行っています。）







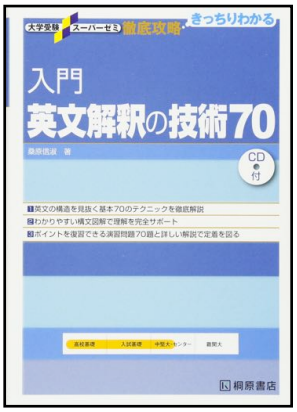


多くの中高一貫校では『Vintage』『Scramble』『Next Stage』『Power Stage』『Upgrade』のいずれかの文法語法問題集を生徒に一冊購入させて学習させています。基本、これは網羅的な自学自習用教材なので、学校の定期試験の出題範囲に指定されることはあっても、学校授業内でメイン教材として用いられることはまずありません。

私の茗渓での指導では、**学校の方で文法語法問題集を指定している場合はそれと同じものを使用**して、それ以外の場合は上述のいずれかの冊子を生徒に一冊購入してもらいそれを使用して、語法学習を進めていきます。基本は、生徒が指定された範囲を次回指導時までに家庭学習して準備し、それを指導冒頭で語彙テストと共に確認する形です（端的（たんてき）には左側ページだけコピーして演習実施します）。間違えた箇所に関しては私の方でもホワイトボードなどで追加解説を行い、それを全て**ノートではなく冊子の余白に記述**させます。基本文法レベルで理解が浅いと見受けられる場合は、文法演習プリントを渡して家庭実施させます（まったく理解できていない場合は指導内で改めて復習の導入解説・問題演習を行います）。

⑩ 英文解釈

「英文解釈」とは、英文の構造（ＳＶＯＣや関係詞節や分詞構文句による修飾・被修飾の関係など）を正確に把握(はあく)した上で文意を理解することを言います。市販されている参考書では『英文解釈の技術１００』などがその代表です。



こうした参考書を使用しての英文解釈演習は、基本は自学自習で進めます。指導内では、難関大学の過去問や英検２級～１級の長文読解問題を実施した際に、生徒の理解が弱いと見受けられる文をピックアップしてその都度英文解釈を実施します。難関大学を受験する生徒、および生徒側より希望がある場合には、『英文解釈の技術１００』を使用して指導ごとに１問ずつ英文解釈演習を実施することもあります（MARCH以下のレベルであれば不要です）。

単語は文の一部であり、文は文章の一部です。部分は全体の中にあって初めてその意味を十分に成(な)し得(え)ます。だから単語や熟語、構文だけを抜き出してまとめて覚えたりすることは本来は正しい言語学習法ではありません。そうして得た知識は、自分で英語文章を書くとなるとロクに使えないといったことが多々あります。「使えない知識」ばかりをただただ蓄積(ちくせき)するような行為は極めて不毛であり歪(いびつ)なことのようにも思えますが、大学入試で出題される問題で得点するためにはそれが効率的な手段であるのは確かです。（例えば、ネイティブスピーカーは無論そうした学習などせずとも大学受験レベルの語法・文法問題にほぼ正答できますが、一般的な日本人英語学習者が英文を沢山読んで沢山書くという正攻法で英語学習を進めていっても中高の６年程度の期間ではまず間に合いません。）ただ、指導でこれらを扱うと際限(さいげん)がないので、基本的には生徒の必要に応じて自学自習により扱う形にしています。いずれにしろ、語法も解釈もあくまで補助学習という位置付けで捉えて実施すべきもので、こればかりをメインにやりすぎるのは賢明(けんめい)ではないということは留意しておく必要があります。

⑪ 自由英作文（ライティング）

英検の読解演習期には毎回、自由英作文を一本書かせています。www.meikei.org/compo/index.htmlに平常指導とは別の「自由英作文講座」の説明がありますが、私の平常指導内でも基本的に同様の自由作文指導を行なっていますので、詳細はこのページをご覧ください。

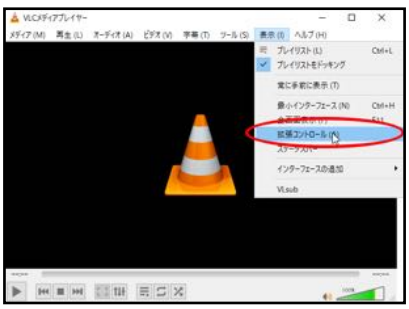
12 リスニング

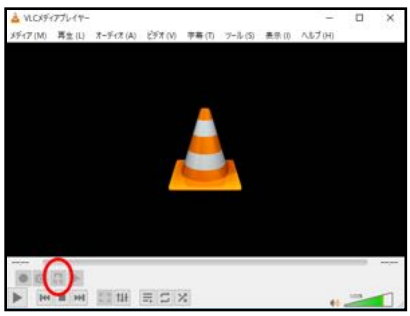
一般的な日本人が英語を学習するのにおいて、比較的容易なのは文法（グラマ）と読解（リーディング）です。これらについては書店に行けば様々な参考書・問題集が手に入りますので、それを黙々とこなして行けば良いだけです。逆に学習が困難なのが自由作文（ライティング）と英会話（スピーキング）です。自由作文は、参考書や問題集を一人で実施していても、模範解答と自分の書いた文章が同じになることはまずありませんから、自己採点しつつ独学していくということができません。スピーキングも相手がいなければ会話は成立しませんし、自分の話している内容が相手にちゃんと伝わっているか、使用した表現が適切かどうかなどは自分一人では判断がつきません。

リスニングは、学習難易度ということに関しては、その中間あたりにあります。リスニング学習自体は独学でも十分可能です。しかし、英会話学校に通っている生徒や英検受験を間近に控えている生徒でもない限り、**なかなかリスニング学習を自発的にしようとはしません**。音声付きのリスニング問題集の類は書店でも入手できますが、段階別・分野別で様々な教材が利用可能な読解や文法に比べると限りがあります。中高一貫校の中には定期試験でリスニング試験を課しているところもありますが、試験一週間前の対策勉強で「よし、リスニングをやろう」という生徒はまずいません。「教科書レッスン２から３（50ページから65ページ）」あるいは「10章受動態と12章不定詞の応用」などの範囲をやっておけばいいという類の問題ではないことが多いので、やりようがないわけです。また、受験勉強においても、多くの私大入試ではリスニングは必要ありませんので、必要度が他技能と比べ落ちるというのもあります。とは言え、国立大学入試では大学入学共通テストがありますし、東大や一橋などでは二次試験にもリスニングが課されます。私大入試でも共通テスト利用入試がありますし、ＴＥＡＰや英検を利用した選抜方法もありますから、リスニングを捨ててしまうと選択肢を大きく狭めてしまうことになるので、あまり賢明ではありません。

私の指導では、**リスニング演習には主に英検の問題を使用**しています。英検は１級から５級までレベル設定もわかりやすくなっていますので、これを利用すれば読解や文法のように段階的・計画的に学習を進めて行くことが可能です。リスニング問題は、普通に音声を聞いてコツコツ解いていくというだけでも良いのですが、**ディクティション（dictation）**も同時に実施していくとより効果的です。ディクティションとは、読み上げられた外国語の文章や単語を書き取ることです。手順は、まず最初にリスニングのＣＤ音声を聞いて普通に問題実施します。次いで自己採点した後、間違えた問題をいくつかピックアップして再びＣＤ音声を聞き、その内容を全て一字一句正確に英語で書き出します。聞き取れない箇所があったら巻き戻して何度もしつこく聞き直します。何回聞いてもどうしてもわからない場所は、①空欄にするか、あるいは②耳に聞こえた音声だけでもカタカナで書きとどめておきます。そうして最後まで行ったら、今度は書き取ったものを放送原稿と照らし合わせて自分が一体どこを聞き取れていなかったかを確認します。（指導内では私の方でも同じ音声を聞いて直接添削することもあります。聞き取り間違えていた箇所や聞き取れていなかった箇所は、最初の一文字と文字数をヒントとして教えて聞き直し再チャレンジさせます。）このようにして**自分が聞き取りを苦手とする発音をしらみつぶしに洗い出していきます**。最後に、放送原稿を見つつもう一度ＣＤ音声を聞きなおします。

ＣＤプレイヤーを使用する代わりに、音声をパソコンに取り込んでＶＬＣという無料アプリを使用して再生するとディクティションが容易にできます（指導ではこれをインストールしたノートパソコンを使用しています）：





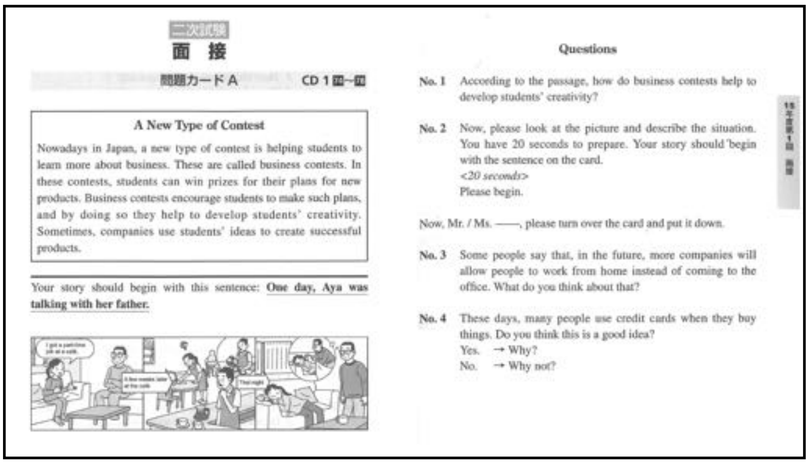
このアプリの**ＡＢループ**という機能を利用すると、任意の２時点間を繰り返し再生してくれるので、例えば放送内容を１文ずつや20秒単位で区切って再生を繰り返し、その箇所のディクティションができたら次に進む、ということが可能になります（手動で巻き戻す手間が省ける）。やり方は簡単で、ＡＢループのボタンをクリックしてループ開始時点を指定し、しばらく経ったらもう一度クリックしてループ終了時点を指定するだけです。（もう一度クリックするとクリアになります。）

リスニングは聞き取りというハードルがある分、放送内容自体は同レベルの読解問題に比べると比較的容易になっています（例えば英検２級のリスニング問題で使用される英文はリーディング問題で使用される英文よりも、共通テストのリスニング問題の英文はリーディング問題の英文よりも、容易です。）だからリスニング問題を間違えるとしたら、ほぼそれは**既知の単語の聞き取りに失敗している**ことが原因となります。生徒がよく聞き取れない単語の代表に「it」があります。中１の一学期に学習する基本単語ですから、誰もがその意味も綴りも読み方も知っているはずです。しかしこれの聞き取りがなかなか難しい。短い単語なので発音が前後の単語と膠着してしまっているためです。例えば「... did it.」は「ディド・イット」と区切って発音されることはまずなく、ほぼ「ディディッ」という感じに聞こえます。「実際の発話においてはこのように聞こえるのだな」ということがリスニング演習を通してわかったら、以後、同じような音に再び遭遇したら、正確に聞き取れるようになれることを目指して学習を続けていきます。

また、仮に自分の耳では音声を聞き取れなくとも、**前後の流れから文法知識を頼りに脳内補完できるようなる**ことも重要です。例えば「It did....」の「It」が聞き取れなくても、英語の文は多くの場合主語から始まるということがわかっていて、それで「イ...」と微妙にでも聞こえていたのであれば、ああ、ここには「It」が入っていたのであろうと察しがつけられます。

⑬ スピーキング

指導内のスピーキング演習としては、主に**英検二次試験対策の模擬面談**を実施しています。英検一次試験合格発表後より二次試験当日までの期間の指導で行なっていきます。英検過去問の質問を私の方から生徒にして、それに生徒が英語で答える形です。


二次試験
面 接
問題カードＡ CD 1

A New Type of Contest

Nowadays in Japan, a new type of contest is helping students to learn more about business. These are called business contests. In these contests, students can win prizes for their plans for new products. Business contests encourage students to make such plans, and by doing so they help to develop students' creativity. Sometimes, companies use students' ideas to create successful products.

Your story should begin with this sentence: **One day, Aya was talking with her father.**

Questions

No. 1 According to the passage, how do business contests help to develop students' creativity?

No. 2 Now, please look at the picture and describe the situation. You have 20 seconds to prepare. Your story should begin with the sentence on the card.
<20 seconds>
Please begin.

Now, Mr. / Ms. ——, please turn over the card and put it down.

No. 3 Some people say that, in the future, more companies will allow people to work from home instead of coming to the office. What do you think about that?

No. 4 These days, many people use credit cards when they buy things. Do you think this is a good idea?
Yes. → Why?
No. → Why not?

生徒の英語での解答に対し、私が直すべき点などをアドバイスしていきます。英検１級の模擬面談の場合、生徒の話した内容に対する質問（つっこみ）なども私の方から英語で行います。

同時間帯で他にも指導を受けている生徒がいる場合、私が他の生徒を見ている間は読解や文法の演習問題を実施していく形になります。スピーキング演習のみを集中的に実施したい場合には「英語スピーキング講座」などにも参加できます。

⑭ 英検・TOEIC対策

進学校に通う一貫校生の場合、高校受験がなく、また大学受験は何年も先の遠い目標になるため、勉強へのモチベィションを維持するのが難しくなることがあります。特に中２から高１までの期間は中弛みしがちです。そこで、年３回受験機会のある英検が英語学習に張り合いを持たせるのに格好の学習目標となります。また、大学附属校生も高等部への進級や大学の希望学部への内部進学において英検級の取得が必要になるケースが多いため、茗渓に通う多くの生徒が英検の学習をしています。

私の指導では主に中学から高１レベルまでの読解演習で英検を利用しています。学校の方でいつまでに何級を取得するようにと言われている場合を除き、**英検級を取得すること自体を目標にはしていません**。私の方からは、英検３級であれば関係代名詞まで、英検２級であれば仮定法まで、その出題範囲の英文法の学習が一通り終わるまでは英検受験を生徒に積極的には勧めません。例えば英検３級であれば中学卒業レベルの文法が出題範囲となりますが、この範囲の文法学習が全て終わらないうちに３級を受験して仮に合格しても、何か利点があるというわけでもないからです。ただ、生徒にとっては早い段階で上の方の級に合格すると自信にもなりますし（「クラスメートはみんなＸ級に受かっているのに…」というプレッシャーもあります）、また良い予行練習にもなりますので、早期受験を止めることはしません。

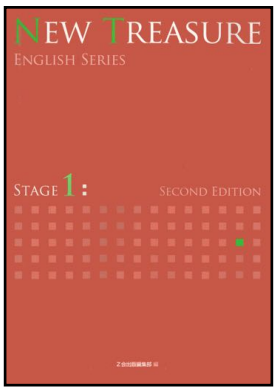
英検受験級の出題範囲の文法学習が全て終わる前に早期受験する場合には、**生徒・ご家庭の要望により**文法学習をいったん中断して英検対策の指導を短期実施することもあります。だいたい早い生徒で、英検４級であれば中１の１月までに、英検３級であれば中２の６月頃には合格しています。（小学校の頃より英会話学校などに通っているような生徒はもっと早くに合格します。）これは、生徒本人が家庭学習で英検対策の学習を頑張ったということもありますが、中高一貫校で使用する検定外教科書の使用語彙数が多く、また茗渓の指導でも語彙テストを毎回実施しているので、これらを通してしっかり語彙力が培われていれば英検の読解問題に関しては文法的に不明な部分が少々あっても十分に得点できるということにもよります。そして、中学受験の国語の読解問題などを通して培われた読解力に依る部分も多分にあります。英検の読解問題は全て選択式なので、同じ語彙力の生徒が同じ問題を実施した場合、地の読解力・判断力の差が如実に現れます。

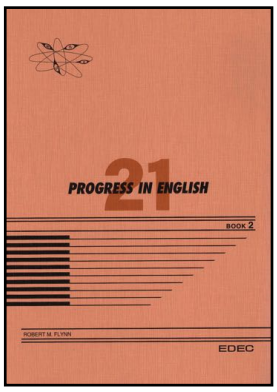
逆に、なかなか目標とする英検級に合格しなくて苦労する生徒もいます。しかし、それは必ずしも悪いことではありません。私の英語指導では、中学英文法学習修了から準２級合格までの間と、高校英文法学習修了から英検２級までの間で読解演習期間を設けていますが、例えば英検準２級になかなか合格しない生徒の場合、このレベルの長文読解演習を相当量実施することになります。逆にすんなり英検準２級まで受かってしまう生徒は、読解演習をそれほど実施しないまま高校文法の学習に即入ることになります。英語が得意な人であれば無論どんどん先に進んでいってもいいのですが、苦手な人であればなおさら、英検３級から準２級までの比較的優しめの英文を大量に読み込んで地力を蓄えていくことはとても有益です。

TOEICについては、英検２級合格後、学校の方で受験を要求されている場合などに対策学習を始めていきます。主に公式問題集を使用して問題演習を行います。TOEICはビジネス英語に特化した内容になっているので、大学受験を目指す進学校生の場合は基本、幅広い分野の英文が出題される英検（あるいはTOEFL）の方を学習していきます。大学附属校生の場合は、大学卒業後の就職活動でTOEIC高得点を取得していれば有利になりますので、生徒の希望により英検準１級の代わりにTOEICの方を学習していくこともできます。

⑮ 定期試験対策

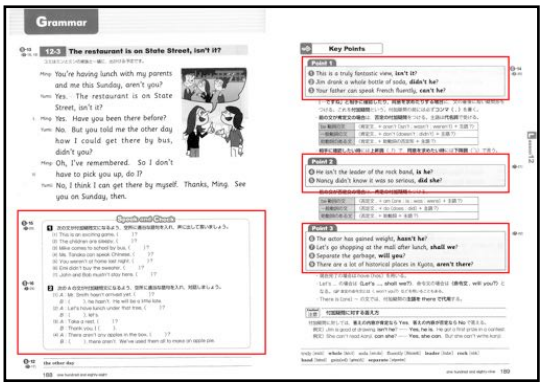
主に検定外教科書の『New　Treasure』や『Progress』を用いる学校の定期試験対策を指導内で実施しています。





学校の定期試験の過去問などは私の方では基本使用しません。定期試験で良い点数を取ることが目標ではありますが、各学校の定期試験ごと、あるいは使用教科書ごとに特化したテスト対策にはせずに、できるだけ応用できる総合的な英語力を身につけられるような形で学習させていきます。例えば、教科書の各章の後に掲載されている２、３ページの「READ」の英語長文が定期試験に出題される場合、まずはその本文をコピーしてノートに貼り付け、知らない単語の意味や難しい構文の注釈などを書き込んでいきます。本文の和訳を丸々文章としてノートに書き出すことはしません。一通り自分でわかる範囲で本文に目を通した後で、私と一緒に口頭で訳をとっていきます。生徒が間違って理解している文や単語についてはその場で訂正し、それをノートに書き込ませていきます。本文を丸暗記するような学習はしません。あくまでその文章中で使用されている単語や熟語、構文、文法などをピンポイントで覚えていきます。次いで、その確認のために右のようなプリントを実施します。

GRAMMARセクションについても同じように学習していきます。New TreasureやProgressは見開きページの右半分および左ページの下半分に、そのレッスンで学習する文法の解説と例文を載せています。この例文を私の方で和文英訳問題に仕立てたものを演習問題として実施します。



英訳演習問題の和文は「文法の演習問題」でも説明した通り、その学習中の文法の基本さえ理解できていれば容易に直訳で解答できるように作られています。難しそうな単語や熟語は全て注釈で記(しる)してありますので、これを実施することで、その文法を学びつつ、かつ定期試験にも出題されるであろう教科書収載(しゅうさい)の語彙の書き取り練習にもなっています。

⑯ タブレット・ノートパソコン

文科省が全国の小中高校でタブレットを積極活用する方針を決めたこともあり、近年、生徒にｉＰａｄなどのタブレット機器やサーフェイスなどのノートパソコンを入学時に購入させて授業で活用している中高一貫校が増えてきています。タブレット/ノートパソコンは英語学習にとても有用な機器なので、もし学校でタブレット/ノートパソコンを利用していたり、あるいはご家庭で使用していない余っているタブレットなどがありましたら、ぜひ茗渓の指導にも持ってきていただければと思います。一番良いのはノートパソコンなのですが、さすがに嵩張るので携行するには少々負担になるかも知れません（頑張って持ってきている生徒もいます）。

無論、茗渓での指導自体は紙と鉛筆さえあれば問題なく受講できます。いずれも高額な機器なので、茗渓での指導のためだけに新たに購入する必要はありません。ただ、タブレットやノートパソコンがあると色々なことが効率よくできます。例えば文法や構文などの解説板書のノートをワープロソフトでとって記録しておくと、一度解説を受けたことのあるものを再び間違えた際には検索機能で以前書いた箇所をすぐに見つけられます（紙のノートの場合、使い切ると容易に参照することができません）。自由英作文もワープロソフトで作成します。出来上がりは教室のコピー機から紙で印刷し、私の赤ペン添削後、それを元にタブレットまたはＰＣ上で校正して再印刷・再確認します。一度書き上げた作文は全て保存してためていきます。

長文読解問題を実施した際に遭遇したわからない単語や熟語は、表計算ソフトで作成した巨大語彙リストを使って調べます。これは英検４級から１級、さらに大学受験用の単語集も網羅したもので、一般的な日本人英語学習者ではあればいずれは丸ごと全部覚えておいて欲しい語彙リストになっています。調べる際はNumbersやExcelなどの表計算ソフトの検索機能を使います。一度調べた後には、その語彙の入っているセルの背景色を変えたり星印（⭐）などのマークを付けていきます。派生語、例文、未記載の定義などは自分で書き加えていくことでリストを「鍛えて」いきます。さらに、語彙テストで使用中の（現物の紙の）市販単語集にもそれが載っている場合には、その箇所を冊子中でも印をつけます。（普段持ち歩いて語彙暗記に用いるのは紙の冊子の方になります。）

語彙を最初に調べるのに冊子の市販単語集を使うと、その該当レベルから外れるより難解な、あるいはより容易な単語は当然載っていません。例えば次に英検２級を受けようという生徒がとある英検３級レベルの単語を知らなかった場合、手持ちのパス単２級冊子で調べても載ってはいません。結果、辞書で調べる二度手間になるわけですが、普通の辞書で調べると「調べて終わり」になりがちです。それが固有名詞だったり英検一級レベルのまだ当面は覚えておかなくても構わないような単語ならいいですが、自分にとって早急に覚えておかなければならない３級レベルの基本語彙を「ただ調べただけ」でスルーしてしまうのは致命的です。

リスニング演習の際は、音声ファイルをタブレットに転送してＡＢループ機能のあるプレイヤーアプリで再生します。通常通りの問題実施・採点後、間違えた問題についてはディクテーション（放送内容を英文のまま書き取る学習法…聞き取れない部分を何度もしつこく聞き返します）を行います。その際、例えば「放送開始１分から１分２０秒までの間」といった具合に短い範囲を指定して、そこを自動で繰り返し巻戻再生するＡＢループ機能を用いると、より効率的にディクテイションができます。